# 樋口一葉のこと

和田芳恵

一葉のおとうさんがなくなったのは、数え年で十八歳でございますから、今でいうと十七歳位になりますか。

その頃一葉はいったいどう考えていたろうかと申しますと、ただ小説家になりたいと思ったらしゅうございますね。で、その原因はなにかと言いますと、萩の舎へ通っておりまして、そこに四つ年上の田辺花圃という姉弟子がいて、この方が「藪の鶯」という小説を書いています。この小説は、近代文学の中で注目していい作品なんです。今読んでみますとあまりたいした作品じゃございませんけれども、坪内逍遙先生が手を入れて直してくださった、女性版の「当世書生気質」と思われます。そういうので問題になった作品なんでございますが、それを金港堂から出版したとき、三十三円二十銭という原稿料が入りました。この頃、荷車運送組合という事業に一葉のおとうさんが失敗して、借金とりに責められているときなので、自分がもしお金を取れるようであれば、少しはおとうさんを助けることができるんじゃないかなあ、というような気持を持ったらしいんですよ。ですから、一葉が小説を書こうとした動機というのは非常に単純なものでございまして、原稿を書いてお金がとれたらということだったと思うんです。実際は、最初は、その程度であったとみる方が、どうも正しいようでございます。

一葉は数え年の十六・七歳の頃から小説らしいものを書いて、それができかからない形で残っているのですが、普通の人より特別の才能があるというふうには考えられないんです。それが何年かの後には、大変な作品を書くようになるわけです。私が最初、樋口一葉のことを調べだしたのは、そういうことも原因になっておりまして、小説を書くことが、あまりうまくない私でもおそらくうまくなる秘訣、というと大げさですが、そういうものがわかるんじゃないかしらというのが、最初の私の気持だったのです。それが妙に深入りしてしまったわけです。今日は、その程度の一葉が、どういうことをもとに小説というものを、うまく書けるようになったんでしょうかということをみてまいりたいと思います。

ご存知のように、一葉の場合ですと、でき上った短編小説は全部で二十一編です。この二十一編のうちで優れた作品はと考えていきますと、誰でもあげる五つの作品「たけくらべ」「わかれ道」「にごりえ」「十三夜」「大つごもり」ということになります。それ位が、まあいい作品だなというところ。そのうち一葉でなければ書けな

いというものが、「たけくらべ」「にごりえ」「わかれ道」だろうと思いますね、そうしますと四百字の原稿用紙になおして、この三編の総枚数は百五十枚にならないと思いますよ。たったそれだけのものを書いて、近代文学の中で指折りの作家という例は、ほとんど日本の文学史を通じてもまれなことだと思います。

じゃあ一葉は、どうしてそんな優れた作家になったのかというと、一葉という女性の生き方が、よかったというところにあると思うのです。作品としてむろん優れていなければ話になりませんが、その作家の生き方と、作品は分離することができません。人間と同じ位置に作品もあるということなのです。それが、やはり一葉の場合では重要な一つの問題になるんだと思います。

一葉は、非常に作品の幅の狭い作家でございます。まだ明治中期という、女の人の開放されていない、封建的なにおいのたいへん濃い中で、女に生まれたということだけで、すでに男と比べて不幸であるということを感じとった一人の女、樋口一葉がおりまして、その人が、なんとか男と同じような幸せ、あるいは幸せでなくてもいいんですが、男とせめて同じ位になるのが当然じゃないかという、そういう考え方を持って書いたのが二十一編なんです。

一葉の小説のテーマは失恋が中心になっています。一葉の場合、まだ、家名を汚してはいけないとか、親・兄弟に迷惑をかけてはいけないとか、そういう一つの制限を受けた中で恋愛というものを考えていたわけなのですから、従って、やはり失恋という形が起きると、その人にとってはもう一生の致命傷というか、ずいぶん深い嘆きを感じなければならないような、そういう時代であったのです。そして最終段階で「たけくらべ」を書いたのですが、この場合になると、美登利という娘が生理的にみておとなになる。これから恋愛ができるというその過程に入ったときに、すでにこの女の人は、姉が辿ったと同じように身をうる女にならなければならない境遇にいるということ。それに美登利が気づかないでいるあわれさを、やはり追求しているわけです。その中で信如という若い坊さんとの淡い恋も、実を結ばずに終ってしまうのです。

「武蔵野」という雑誌に、「闇桜」を活字にしたのが、まあ最初の小説なんでございますが、この中にでてくる学生の良之助に恋した娘の千代は、恋わずらいで死んでしまいます。この千代は、どうやら一葉自身を書いているらしい。また、良之助は、一葉と一時許嫁の間柄だった渋谷三郎でしょう。

一葉の父親のなくなる頃に、一葉と結婚の約束をしたこの渋谷三郎という人は、一葉の家が事業に失敗してお金がないことがわかると、父親の死後、人を通じて一方的に婚約を破棄してしまいました。で、その人とだめになった状態というのが、非常に問題になると思うのですけれど、このことわられたということを、一葉はとても深く考えたらしいんです。実際の経験として、経済的な問題として考え、それから、

男というものは案外あてにならないものじゃないかしら、というふうにも考えたでしょうし、愛情という形のないものは、いったいどういうものなんでしょうということも考えたりしました。

このことを考えながら、一葉は数えの二十歳にたどり着くわけです。それで、半井桃水について小説の勉強をするのですが、自分が一番の関心事であった、男女の恋愛のうちの失恋ということをとり上げて、桃水の同人雑誌に「闇桜」を書きました。で、それからは一貫して同じテーマを追いかけます。初めの作品「闇桜」の場面が「たけくらべ」の中で別な形で結晶しているという様に。

これは、同じことをくり返しくり返し追った、ということになるでしょう。ですから一葉の場合、結局一つのテーマ、最初の一つのテーマというものを、いろいろな形で、ああではないかこうではないかというふうにくり返していったことになります。この同じことをくり返しているうちに、だんだんうまくなるもとがあったのでしょう。一葉は、最初から、問題を作品で解きあかしてみたいという願いがありまして、それを一生懸命やっているうちに「たけくらべ」のような、優れた作品を作れるようになったわけです。一葉の作品を読んでみて、別なものをやってみてもよかったろうという気はするのですが、そうすると深く窮めるというが、とてもできなくなると思うのです。考えようによると、この同じことのくり返しは退屈なことなのですけれど、同じことをしているうちに、短期間、と言ってもかなり時間はかかりますが、そのうち完成する道がでてくると思うのです。

では、一葉は小説だけかと考えますと、小説が中心になっているのですが、本当は歌人になりたかったんですね。和歌は、清書した形で残っているのが、三千五百首ほどあります。中島歌子の萩の舎へ和歌の弟子として入ったのが、数えの十五の夏のことでございますから、それから明治二十九年までの和歌です。その前にも和田重雄という人について少しやっています。そのたくさんの歌の間に、四回、自分の自撰和歌集を作ろうとしています。これがもし、活字になって世の中に出たのならば、第四歌集までの仕事を自分でしているわけです。一葉はあらゆる場合、作りっぱなしということがありません。小説の場合もそうですが、歌の場合も必ず読み直してみて、自分はどこまでいっているんだろうという観点から、一つまとめてみようということを必ずやっています。

そのほかに一葉は、大変長い日記をつけているわけですが、これは数えの十六歳から二十五歳までの日記でございますが、ときどき全部読み返してみて、「随感録」というような随筆的感想になっています。そのたびにふり返ると同時に、これからの生き方をもう一度考えるということをやっているようです。

和歌の場合、日記の場合、小説の場合、どういうやり方をしても、別なやり方は一つもないのです。その中で一番うまくいっ

たのが小説の場合なんですが、歌の場合でも、それを長い間やっていたら、歌人としても相当優れたものになっていたろうと思われます。一葉は、兼題という、決められた題を先生からもらって歌を読む、旧派の歌人なんですが、それが晩年の形になってくると、自分で詞書をつけて、それにそうした歌を作っています。ですから、晩年の一葉は、自分らしい、自由な歌を作ったに違いないという、形だけは残っているのですが、そこまでいかないうちに死にました。

一葉は自分が家の面倒をみなければならないということを、数えの十八のときにしょわされています。長い間療養生活をつづけていた長兄の泉太郎が死に、次兄の虎之助は勘当されていたので、一葉が相続人になるわけです。明治の頃では家が中心で、相続人は親をみなければならないことが、もう宿命的に決っているようなものでございますから、自分の親兄弟を、自分がみることが義務づけられているわけです。だから、自由でないと言ってもいいと思うのですが、その愛の中で生きていかねばならない。その中に、やはり相当の制限があったとみていいと思うのです。しかも、一葉は生活的にも、楽でなかったわけです。一葉の、金を借りて歩いた証文が残っておりまして、その金高をみると、七円・十五円という二種類です。七円は一ケ月の、十五円は二ケ月の生活費ですが、これを親子三人（母親・妹のくに子）で割ると、二円とちょっとです。今でいうと、民生委員の保護を受けるような生活だったんじゃないでしょうか。そういう、どこからみてもほっとするところのない生活です。そうしますと、人間というものは、何かで慰められるしかないのですが、それは一葉にとっては、日記だったと思うのです。日記には一葉の生き方が、非常に素直な形ででています。斎藤茂吉が、「赤光」の題名で〃「赤光」は過去時に於ける私の悲しい命の捨どころであった。〃と書いておりますが、一葉の場合でも日記は当然、そういうものだったと思うのです。自分の気持をたしかめながら日記を書いていって、もう一方では、一つのテーマを決めたもので小説をくり返していって、それが、あるとき、この両方の技術が一緒になるときがあったのでしょう。武者小路実篤が、〃小説を書くのを、手紙を書くような気持で〃と、何かに書いてますけれども、小説となると、どうしても堅くなるんです。

一葉は、下谷竜泉寺町で商売を始めたあとごろからの、日記そのものも良くなるのですが、同時に、小説の書き方も前のものと比べて、非常に楽に自由になってきます。どうしてかというのは、簡単に言うことができないのですが、同じことを長い間くり返しているうちに、ふっと、自然に身につくものじゃないでしょうかしら。一葉はそういう形で、優れた小説を書けるようになったのだと思います。

こういうことは、やはり自分で苦しみ悩んで悟るよりしようのないものだと思います。（立正文芸学会での講演より筆記・吉田光津枝）